

# 第1子の妊娠待ち時間と第2子出生のタイミング

—妊孕力と出生力の関連についての予備的分析—

## Time to Pregnancy of the First Birth and the Timing of the Second Birth: A Preliminary Analysis of the Association between Fecundity and Fertility

小西祥子 (東京大学、ワシントン大学)

Shoko Konishi (The University of Tokyo, University of Washington)

moe@humeco.m.u-tokyo.ac.jp

背景：生まれた子どもの数である出生力に対して、妊娠する（妊娠させる）生物学的な能力のことを妊孕力という。妊孕力の指標として、避妊をやめてから妊娠するまでの期間の長さである妊娠待ち時間（time to pregnancy, TTP）が広く用いられている。男女ともに年齢は妊孕力と強く関連する一方で、同じ年齢でも妊孕力には異質性が存在する。集団内にみられる個人間の妊孕力の差異が、出生力の高低と関連しているか否かについては一致した見解が得られていない。そこで本研究は、妊孕力と出生力の関連を分析することを目的とした。

方法：日本に居住する楽天リサーチモニターのうち、20-44歳の経産婦4766名から、第1子を授かるまでのTTPおよび第2子出生の時期についてオンライン質問票を用いて尋ねた。また第1子を妊娠した際の状況（避妊をしていたが妊娠した、避妊をやめた結果妊娠した、避妊は交際当初からしていなかった）、妊娠企図（早く子どもが欲しかった、まだ妊娠するつもりではなかった、（もう）妊娠するつもりはなかった、とくに考えていなかった）、出生時の年齢、出産時の妊娠週数、第1子の父親との結婚年月、調査時点における婚姻状況についても情報を収集した。TTPは4群（0-3, 4-6, 7-12, 13+か月）に分け、第1子出生から第2子出生までの期間との関連を生存分析によって解析した。調査時点までに第2子の出生がない場合には打ち切りとして扱った。

結果：分析の対象は「避妊をやめた結果妊娠した」と回答した2014名とした。TTP群ごとの人数は、0-3か月919名（46%）、4-6か月319名（16%）、7-12か月260名（13%）、13か月以上418名（21%）、不明98名（5%）であった。調査時点における第1子の年齢の中央値（四分位範囲）は3（1-6）歳、第1子出産時の母親の年齢は30（28-33）歳であった。母親の年齢、婚前妊娠、妊娠企図、婚姻状況、母親の年齢と婚前妊娠の相互作用を調整してもなお、TTPが0-3か月の母親と比較して、13か月以上の母親は、第2子追加出生のハザードが低かった（hazard ratio HR: 0.79, 95% confidence interval CI: 0.65-0.96）。TTPが4-6か月および7-12か月の群については、TTPが0-3か月の群と有意に異なる追加出生ハザードは観察されなかった。今回の解析の結果は、年齢の影響を調整してもなお、妊孕力の低い女性（カップル）の方が追加出生を経験する確率が低いことを示唆する。この関連のメカニズムについてさらなる検討が必要である。